探究的な学習の在り方に関する研究推進地域

連携中学校区：大崎上島町立大崎上島中学校区

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
大崎上島中学校	５	９６
大崎小学校	８	１２５
東野小学校	６	４３
木江小学校	５	２７

（R4.11.1現在で記入）

１　研究の概要

（1）研究テーマ及び研究のねらい

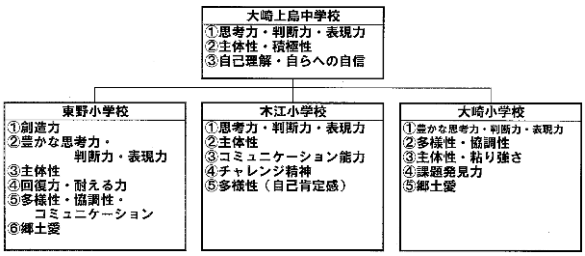
大崎上島中学校区では幼小中連携プロジェクトを推進し，「大崎上島学」を基盤とした学びを展開している。「大崎上島学」とは，単に自分のふるさとを知るだけでなく，島の自然，伝統・文化，産業や暮らしを児童生徒が探究することで，自らを見つめ直し，自分の生き方を考えることにつなげようとする学習のことである。地域のすばらしさに気付かせ，地域に誇りに思う心や，地域の発展に貢献する態度を育てることを目標にしている。生活科や総合的な学習の時間も「大崎上島学」の目標達成の一役を担っている。しかし，「大崎上島学」の蓄積はこれまでの成果であるものの，学習内容が形骸化しているところがある。また，児童生徒は，意欲的に学習に臨むことはできているが，探究課題において，主体的に進んで活動を進めることやさらに学びを深めることに課題がある。

そこで，研究テーマを『大崎上島を担う　たくましく生きぬく子供の育成～「大崎上島学」のさらなる充実を通して～』と設定した。「大崎上島学」を，ＰＢＬの考え方をもとにさらに発展・深化させていくことがねらいである。「大崎上島学」のさらなる充実によって，将来の大崎上島を担う児童生徒の資質・能力を向上させることが大きな目標である。

（2）資質・能力の設定について

大崎上島中学校区では，各地域の実態に応じて育成を目指す資質・能力を設定している。生徒の実態に応じて，どのような資質・能力の育成を目指していくのかを検討し続けている。

大崎上島中学校区　育てたい資質・能力　系統図
（R04.01.14）



大崎上島中学校では，「広島県の１５歳の生徒に身に付けておいてもらいたい力」や町内３小学校での育てたい資質・能力を踏まえたものとしている。

（3）取組について

昨年度明らかになった課題を踏まえ，次のことに取り組んだ。

取組Ⅰ：探究過程のふり返りの充実

取組Ⅱ：教師も児童生徒も同じゴールイメージを持つための工夫の充実

取組Ⅲ：児童生徒のこれまでの知識や経験を踏まえた単元構成の工夫の充実

取組Ⅳ：児童生徒の変容を見取る工夫の充実

取組Ⅳについては，中学校区共通のアンケートとして，「大崎上島学」アンケートを作成し，実施した。このアンケートは「大崎上島学」への思いについての質問のセクション，「大崎上島学」への取り組み方への質問のセクションの２部に分けた。主な結果については，「３．研究の成果と課題等」で述べる。また，取組Ⅰ～Ⅲについては，「２．実践事例」の中で，どのように取り組んだのかを述べていく。

２　実践事例

【大崎上島中学校第２学年での実践事例】

大崎上島中学校では，奥村好美，西岡加名恵（編著）『「逆向き設計」実践ガイドブック』（日本標準，2020年。以下，『逆向き設計ＧＢ』と記す。）を参考に，授業研究に取り組んでいる。「逆向き設計論」とは，G.ウィギンズ，J.マクタイ（著），西岡加名恵（訳）『理解をもたらすカリキュラム設計―「逆向き設計」の理論と方法』（日本標準，2012年）という著書の中で提案されている，カリキュラム設計論である。「逆向き設計論」では，①求められている結果を明確にする，②承認できる証拠を決定する，③学習経験と指導を計画する，という３段階で単元を設計することが求められる。その中で，②「承認できる証拠」としては，「パフォーマンス課題」が重要な役割を果たし，①「求められている結果」は「ゴール」，「(永続的) 理解」と「本質的な問い」，「知識と技能」に分けて記述することが求められる。「本質的な問い」と「(永続的) 理解」，「パフォーマンス課題」について，逆向き設計ＧＢでは，次のように述べられている。

「本質的な問い」とは子どもたちが「理解」に至るような教科の探究や「看破」を促す問いである。深く掘り下げることで子どもたちが自ら「永続的理解」に至ることを意味する。「本質的な問い」があることで，教師が教え込むのではなく，子どもたちが追及の結果「永続的理解」に至るような学習を生み出す設計が可能となるといえる。（Ｐ．１４）

パフォーマンス課題をつくる際には，その課題を通して問わせたい「本質的な問い」と，子どもたちに至ってほしい「(永続的) 理解」をあわせて設定することが重要である。（Ｐ．３７）

そこで，大崎上島中学校では，「本質的な問い」と「永続的理解」，そして，これらを踏まえた「パフォーマンス課題」を設定し，学習指導案に記述することにしている。「パフォーマンス課題」は“単元を貫く問い”となり，「パフォーマンス課題」を解決することが，授業者と生徒で共通した単元のゴールとなる。

大崎上島中学校第２学年では，例年，職場体験学習を行っている。中学校のキャリア教育の中でも核となる学習活動である。しかし，重要な意味を持つ学習であるがゆえに，職場体験学習を実施すること自体が学習のゴールのように位置づいてしまいがちである。そこで，本質的な問いを「“なぜ，働くのか？”という問いに，私たちはどのようにアプローチしていけばよいのだろう？」，永続的理解を「大人の社会と関わる中で，大人もそれぞれの自分の世界を持ちつつ，社会で責任を果たしていることに気付くことが大切である。働くことや職業を自分との関わりで考えることや，自己の将来を展望しようとすることは，自己の生き方を考えることに直接つながっていく。(学習指導要領解説 総合的な学習の時間編を参考)」と設定し，以下のパフォーマンス課題を設定し，レポート作成を単元末課題として明確に掲げた。

以下の２点を踏まえた「レポート」を作成すること。
・【自分の未来への視点】将来，職業や進路を選択する上で大切だと思ったこと。また，仕事をする上で大切だと思ったこと。
・【島の未来への視点】大崎上島の暮らしを守り，発展させていくために大切だと思ったこと。

「島の未来への視点」は「大崎上島学」のねらいをより意識した視点である。島の未来を担う子供としての成長や，探究がより深いものになっていくことを期待した。

また，学習の振り返りで用いる「ふりかえりシート」の工夫を行った。具体的には，本単元育成しようとする資質・能力から，「評価項目」を改めて設定した。以下がその３点である。この３点についてルーブリックも作成した。

①探究すること：プロジェクトの達成目標に向けて，よりよい方法を考え取り組むことができる。【「思考力・判断力・表現力」に対応】
②自ら行動すること：失敗を恐れず行動・チャレンジする。そして，その結果を次の活動に生かそうとする。【「主体性・積極性」に対応】
③自分を見つめること：活動を通して，今の自分を振り返って考えたり，自分の将来（生き方・働き方）について考えたりすることができる。【「自己理解・自らへの自信」に対応】

資質・能力から，「評価項目」を設定することで，生徒が毎時間の自己評価に取り組みやすくした。

この実践の学習過程については，「学習指導案」の「実践記録」の中で詳しく述べている。それを参照されたい。

【木江小学校第３・４学年での実践事例】

小学校３校では，「大崎上島学」小学校各学年において，「K授業」として，総合的な学習の時間や生活科の取組を交流する場を設定している。具体的には，各学年で３校共通のテーマを設定し，探究活動を行い，発表会を行っている。発表会にはお世話になった地域の方も招き，それが児童の意欲にもつながっている。

木江地区は高齢者が人口の約５８％を占め，また，木江小学校の全校児童は２７人と，少子高齢化が特に進む地域である。第３・４学年は複式学級として，１つの教室で８名が学校生活を共にしている。「大崎上島学」において，小学校３年生は「大崎上島の宝物」，小学校４年生は「大崎上島の自然」をテーマとして設定している。その中で，今年度木江小学校では，３年生は「人のやさしさ」，４年生は「自然のやさしさ」をテーマとしてそれぞれ設定し，「木江のやさしさ」を３，４年生学級の共通テーマとして学習を進めてきた。異学年が同じ方向で学習を進めるための１つの工夫である。３年生，４年生は時には合同で，時には別々に探究活動を進め，その成果を校内の学習発表会においては合同で発表したり，３校合同「K授業」においてはそれぞれで発表したりしてきた。しかし，福祉や環境について知ることはできたが，実際に自分たちが地域のために活動できることについて考え，行動することができていなかった。そこで，実際に行動し，地域の方の気持ちや努力に気付かせ，地域の一員としての役割を果たしていこうとする力をつけていきたいことから，「来てくれたお年寄りの方に喜んでもらえるにっこりほっこり交流会を開こう！」と課題を再設定し，単元を設計した。

本単元で児童は，まずアンケートを実施・分析を行う。ニーズに合うように，交流会の企画を考える。できあがった企画書は社会福祉協議会の方にも見ていただき，実施へのアドバイスをいただく。そして，交流会を運営することが単元のゴールとなる。

大崎上島町「探究的な学習の在り方」研究推進協議会の提案授業として実施した，児童それぞれが考えた交流会の計画書を３つにしぼることを目標にした授業では，企画書に付箋を貼り，それぞれの企画のよいところや疑問点を可視化しながら話し合いが進んでいった。企画書を３つに絞るために，誰かの企画案をすぐに却下するのではなく，合体案はないのか，よりより交流会にするためにはどうすればよいのか，お互いの意見を尊重している姿があった。話し合いが立ち止まったときには，授業者から事前にみんなで考えた「話し合いのポイント」を提示し，それに照らし合わせ児童が主体的に企画を吟味していた。話し合い活動において，教師のファシリテーターとしての役割はとても重要なものとなるが，本授業では子供たちの活動を見守り，適切なアドバイスを最小限度で行い，子供たちの主体的な活動をサポートする授業者の姿があった。結果，「準備にかかる時間」を考慮に入れることで，３つの企画に絞ることができた。授業の終盤では，「ふり返りシート」を活用した。中学校での取組と同様に，本単元で育成しようとする資質・能力から，「評価項目」を改めて設定することに加え，その「評価項目」を各授業で１つに絞れるようにした。発達段階を考慮し，効果的に振り返りしやすくするための工夫である。

３　研究の成果と課題等

（１）成果

「大崎上島学」アンケートにおいて，「①進んで学習したり，表現したりする力が身に付いた。」という質問，「②地域のためにできることを考えたり，地域のために行動したりすることができた。」という質問に対して，後期の肯定的評価は小学校・中学校ともに８割から９割を占めた。そして，「よくあてはまる」と回答した割合が前期，後期で次のように変化した。

よくあてはまる	①		②	
	前期	後期	前期	後期
小学校全	46.2%	55.1%	42.9%	44.9%
中学校全	27.1%	30.7%	25.9%	39.3%

主体性や表現力の伸長を児童生徒が実感し，そして，学びが地域への還元へとつながっていることがわかる。

また，昨年度の課題から，振り返りを充実させる取組として「ふり返りシート」の作成を行った。「ふり返りシート」は実践を重ねながら，小学校版，中学校版と大崎上島中学校区で共通した形になりつつある。これも成果の１つであるといえる。

（２）課題および今後の改善方策等

木江小学校の提案授業後の協議会では，重点課題として取り組んできた「振り返り」が１つのキーワードとなった。効果的な振り返りにするためには，「授業の目標の達成ができたか」という視点の他にも，「なぜ目標が達成できたのか」と，“方法”についての視点も持たせることが必要なのではないかという意見があがった。授業でいえば，「なぜ今日は，話し合いがうまくいったのだろう？」という問いである。成功体験，そしてその過程について振り返ることで，資質・能力の向上につながっていく。振り返りの充実のためにどうすればよいのかということをこれからも探究していきたい。

充実したふり返りは次の授業のスタートにつながる。授業者から「今日は〇〇をしましょう。」と言うのではなく，子供から前時を踏まえ，「今日は〇〇をしよう！」と声があがり，探究の中に子供も大人も入り込んでいく単元の設計を進めていきたい。

引用参考文献

奥村好美，西岡加名恵（編著）『「逆向き設計」実践ガイドブック』（日本標準，2020年）